

島田良二著

古今集とその周辺

笠間書院刊

島田 良二（しまだ りょうじ）

大正 15 年 4 月 3 日生まれる。

略 歴 東京大学文学部国文学科卒業（昭和 27 年）

同 文学部大学院修了（昭和 32 年）

茨城大学文理学部講師，茨城大学人文学部助教授を歴任。

現 在 千葉大学教養部教授，千葉大学文学部研究科教授。

著 書 平安前期私家集の研究（昭和 43 年）

曾禰好忠集全釈（神作光一氏と共著）（昭和 50 年）

現住所 〒 281 千葉市稲毛台町 16-18

古今集とその周辺

●笠間叢書 211

昭和 62 年 11 月 20 日 初版発行

定価 11,000 円

検 印
省 略

著 者 島田 良二◎

発行者 池田つや子

発行所 有限会社 笠間書院

〒 101 東京都千代田区猿楽町 2-2-5

☎ 03-295-1331(代) 振替東京 1-56002

3391-951211-0924

科学図書印刷・手塚製本所

（本文用紙：中性紙使用）

目 次

一、古今集の成立と時代背景	一
二、六歌仙時代	一六
三、古今集の恋歌における比喩的表現について	二九
四、古今集と後撰集の恋歌	三三
五、古今集の公的性格について	三七
六、古今集の四季と恋歌	四四
七、古今集の枕詞	一〇八
八、古今集における「花」の解釈	一三八
九、古今集と私家集	一三七
十、後拾遺集と金葉集の恋歌について	一五二
十一、八代集における月について	一七〇
十二、凡河内躬恒	一九四

十三、〃暗きより暗き〃の主調音——和泉式部——	三八
十四、伊勢集の歌物語化	三三
十五、伊勢集の諸本とその系統	二五
(付) 資料 内閣文庫蔵「伊勢集」本文翻刻	三七
書 評	

大阪女子大学編『後撰和歌集総索引』	三九
岸上慎二著『後撰和歌集の研究と資料』	三二
関根慶子著『中古私家集の研究』	三三
森本元子著『私家集の研究』	三六
蔵中スミ著『歌人素性の研究——平安初期和歌文学の世界——』	三九

索引

引用文献索引	三七
書名索引	三五
人名索引	三六
引用和歌索引	三七
内閣文庫蔵「伊勢集」和歌索引	三九
あとがき	

一、古今集の成立と時代背景

序

万葉集の詠歌年時の最後は太伴家持の天平宝字三年（七五九）正月一日であり、古今集が撰進されたのは延喜五年（九〇五）四月十八日であるから、その間およそ百五十年の歳月が流れている。和歌史では「読み入しらず時代」「六歌仙時代」「撰者時代」としているが、古今集の仮名序では万葉以後は、和歌は「色好みの家に埋れ木の人知れぬこととなりて、まめなる所には花すすき穂にいだすべきことにもあらずなりたり」とあり、私的な生活の場で詠まれて宮廷の公的な場からは消え、恋愛のなかだちとして用いられていたとしている。古今集は最初の勅撰和歌集であるが、撰者紀貫之らは、序によると万葉集を平城天皇の勅撰集と信じていたようである。そして、柿本人麿・山部赤人を「公」の歌人として高く評価している。つまり和歌が宮廷の「公」の場の文学として栄えた万葉時代をなつかしみ、古今集を勅撰集にふさわしい「公」の文学として撰集し、その自信のほどを「歌のさまを知り、ことの心を得たらむ人は、大空の月を見るがごとくに古^{いにしへ}を仰ぎて今を恋ひざらめかも」と言っている。では次に、私的な場で主に恋歌として詠まれていて、漢詩に圧倒されていた、和歌の空白時代とも言われている、読み人知らず時代の和歌は「公」の和歌としてどのように詠まれていたかを概観してみよう。

読み人しらず時代は、桓武・平城・嵯峨・淳和天皇のおよそ五十年と考えてよいだろう。桓武天皇は、延暦十四年（七九五）四月十一日に、

十四年四月戊申、曲宴させ給ひ、天皇古歌を誦し給ひて曰はく、

いにしへの野中ふる道あらためばあらたまらむや野中ふる道

尚侍従三位百済王明信に勅して之に和せしめ給へども、成すを得ず。天皇自ら代りて和し給ひて曰はく、

君こそは忘れたるためにぎ玉のたわやめわれはつねのしらたま

侍臣万歳を称す。（類聚国史）

とあり、これについて橋本不美男氏は「王朝における晴の場の和歌の一つの性格」を見だし、そこに和歌史的意義を認めている（『王朝和歌史の研究』）が、こうした「公」の場で詠まれた和歌がわずかであるが、文献に書きとめられている。それは、細々とはあるが、晴の歌としての和歌的存在が私的和歌に並行して続いていたことを示している。

延暦十六年（七九七）十月癸亥（十一日）、曲宴させ給ひて、酒酣におよび、皇帝歌ひ給ひて曰はく、

この頃の時雨の雨に菊の花散りぞしめべきあたらしその香を（日本紀略）

この歌も集団の場で詠まれたものであり、歌は素朴なものであるが、天皇自らが歌ったものである。

延暦十七年（七九八）八月庚寅（十三日）、北野に遊獵させ給ひて、便ち伊予親王の山庄に御し、飲酒高会す。時に日暮れ、天皇歌ひ給ひて曰はく、

けさのあさけなくちふ鹿のその声を聞かずはいかじ夜はふけぬとも

登らせ給ひし時、鹿鳴く。上欣然として群臣に之を和せしめ、夜を冒して乃ち帰らせ給ふ。（日本紀略）

和歌が歌われた事情がよく伺われるとともに桓武天皇が和歌を好まれたことが分かる。

延暦二十年（八〇一）正月丁酉（四日）、曲宴せさせ給ひしに、この日、雪降り、上歌ひ給ひて曰はく、

うめの花こひつつをればふる雪を花かも散ると思ひつるかも（日本紀略）

この歌も、集団の場の曲宴の席で歌われたものであり、後の王朝和歌の性格の一端を担うものである。

延暦二十二年（八〇三）三月庚辰（二十九日）、遣唐大使葛野麿・副使石川道益餞を賜ひ、宴を設くることもはら漢法による。酒酣になり、上、葛野麿を御床下に喚び給ひ、酒を賜ひ、天皇歌ひ給ひて曰はく、

この酒はおほにはあらず平らかに帰りきませといはひたる酒

葛野麿涕涙すること雨の如し。宴に侍する群臣流涕せざるはなし。（日本紀略）

こうした場において和歌が歌われることが効果的であり、和歌の「公」の場における存在価値と生活に密着した意義があることを示している。

平城天皇は在位わずか三年であるが、古今集に一首、

奈良のみかどの御うた

90 故郷となりにし奈良の都にも色は変らず花は咲きけり

と詠まれているが、これも奈良の御幸の折の宴席で歌われたものであろう。

大同三年（八〇八）九月戊戌（十九日）、神泉苑に幸せられし時、勅ありて、従五位下平群朝臣賀是麻呂に和歌を作らしめて曰はく、

いかに吹く風にあればか大島の尾花の末を吹き結びたる

皇帝嘆悦せさせ給ひ、即ち従五位上を授け給ふ。（日本後紀）

これはまさしく晴の歌である。こうした形で詠まれた歌がこの時代かなりあったのではなからうか。当時はまだ平

仮名が発明されなかったので、伝唱歌として伝わり、いつのまにか消え失せたのであろう。平城天皇が、万葉集撰集を命じた帝と紀貫之らに思われていたことは真名序に示されている。

さて、次の嵯峨天皇（在位八〇九―八二三）は、漢詩を作り、かつ推奨した帝であり、弘仁五年（八一四）「凌雲新集」が勅撰され、続いて弘仁九年（八一八）には「文華秀麗集」が勅撰され、漢詩が公の場である宮廷社会で栄え、和歌は漢詩に圧倒され、男女の恋愛のなかたちとして贅けの歌の世界で命脈を保ち、この時代は、いわゆる「読み人しらず」の時代の中心をなすのであるが、和歌も「公」の場で全く詠まれなかったわけではない。

弘仁四年（八一三）四月甲辰（二十二日）、皇太弟（淳和）の南池に幸せさせ給ひ、文人に命じて詩を賦せしめ給ふ。右大臣藤原園人歌をよみ奉りて曰はく、

今日の日の池のほとりに時鳥たひらはちよと鳴くは聞きつや

天皇和し給ひて曰はく、

時鳥なく声きけば歌ぬしとともに千世にとわれも聞きたり（日本紀略）

右大臣藤原園人は嵯峨天皇の平安と長寿を祝賀し、天皇もそれに答えるといった、君臣一体の「公」の歌であり、嵯峨天皇は漢詩を詠み、奨励し、漢詩の全盛を招来させた一方、和歌に対しても全く関心がないわけではなく、自ら歌い、前代に続いて、晴の歌の場を存続させていることをこれは示している。

東宮の雅院にて、桜の花の御溝水みかはみづに散りて流れけるを見てよめる

菅野高世

81枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水のあわとこそなれ（古今集・春下）

この歌は嵯峨天皇の弘仁年間に詠まれたものと思われ、集団の場で晴の歌として詠まれたと推定される。古今集の晴の歌の最も古い例として注目される。歌の表現は「あだ」「あわ」と、かなり知的観念的である。

次の淳和天皇（在位八二三―八三三）の時代には、勅撰漢詩集「経国集」が天長四年（八二七）に撰せられ、前代に続

いて、漢詩の全盛期を迎え、和歌の地位は、次の六歌仙時代を待たなければならぬが、しかし以上三代の読み人しらず時代に詠まれた衰^への歌は相当多く、古今集に相当数採られている。こうして、この時代の「公」の文学は漢詩であったのであるが、晴の和歌も細々と続いていたのである。

二

次の仁明・文徳・清和・陽成・光孝天皇の約五十年間が六歌仙時代であり、平仮名が発明普及され、さらに和歌がよく詠まれて、徐々に後宮・官廷に浸透し、晴の歌としての地位を確保して行き、撰者時代を出現させる基礎を築いた時代である。

仁明天皇（在位八三三—八五〇）の御代に、

承和十二年（八四五）正月乙卯（八日）、（中略）従五位下尾張連浜主、（中略）時に年一百十三、自ら此の舞を作り、表を上りて長寿楽を舞はんことを請ひしが、表中、和歌を載せ、その詞に曰はく、

ななつぎの御代にまわへるもちまり十の翁の舞たてまつる

同丁巳（十日）、天皇、尾張浜主を清涼殿前に召し、長寿楽を舞はしめ給ふ。舞ひ畢り、浜主即ち和歌を奏して曰はく、

翁とて侘びやはをらむ草も木も栄ゆる時に出でて舞ひてむ

天皇賞嘆せさせ給ひ、左右涙を垂れ、御衣一襲を賜ひ、罷退せしむ。（続日本後紀）

とあり、公の場で歌が詠まれている。

嘉祥二年（八四九）三月庚辰（二十六日）、興福寺大法師等天皇の宝算四十に満ちさせ給へるを賀し奉ると為し、（中略）之に長歌を副へて奉獻す。その長歌の詞に曰はく、

日本の本　やまとの国を　かみろぎの　すくなひこなが　芦菅を　植ゑ生はしつつ　国固め　つくりけむよ
り（以下略）（続日本後紀）

と長歌を賀の歌として詠んだのは注目される。仏教の世界に万葉の伝統が生きていたのである。

承和五年（八三八）には小野篁が遣唐副使として乗船を拒んで隠岐に配流され、次の歌を詠んでいる。

おきの国に流されける時に舟に乗りていでたつとて、京なる人のもとにつかはしける　小野篁朝臣
407 わたのはらやそしまかけてこぎ出ぬと人にはつげよあまのつりぶね

漢詩にすぐれている篁が和歌に心中を託して詠んだところに、和歌の生命がいかに強いものであるか、また和歌の存在価値がいかに高いものであるかが示されている。

また、この時代に広井女王と篁が哀傷歌を詠んでいる。

諒闇の年、冷泉院の桜を見てよめる

尚侍広井女王

1126 心なき草木といへどあはれなり今年は咲かずともにかねなむ

これは承和十年（八四三）、嵯峨天皇の崩御の翌年に詠まれたものであり、集団の場で詠まれたものと思われる。

諒闇の年、池のほとりの花を見てよめる

篁朝臣

845 水のおもにしづく花の色さやかにも君がみかげのおもほゆるかな

この諒闇は、承和九年七月（嵯峨天皇死）、嘉祥三年三月（仁明天皇死）のいずれかであろうが、広井女王歌と同じく、「公」の場で詠まれた哀傷歌と思われる。当時、哀傷歌は集団の場で詠まれたものであろう。

この時代、僧正遍昭はまだ出家せず、良岑宗貞と称して、

五節の舞姫を見てよめる

良岑宗貞

872 天つ風雲のかよひ路吹きとちよをとめの姿しばしとどめむ

と詠み、これも集団の場で詠んだものであろうが、新しい時代の歌風を示している。こうして六歌仙時代の幕開けが始まる。

文徳天皇（八五〇―八五八）の御代になると、

田村の御時（文徳天皇）に、女房の侍ひにて御屏風の絵御覧じけるに、「滝のおちたりける所

おもしろし。これを題にて歌よめ」とさぶらふ人におほせられければよめる

三条町

930 思ひせく心のうちの滝なれや落つとはきけど音の聞こえぬ

ここに屏風の絵を見て歌を詠む題詠が登場して来た。これは重要なことであり、以後「屏風歌」「歌合」など晴の歌の一端を担う様式となる。こうした歌が女房によって詠まれたことも注目されよう。和歌は最初は娶^けの世界特に女性の世界のものであったのであるから、「晴」の歌としての地位を確保して行く過程で、後宮社会・女房社会の力が参与するのは当然であり、そうした面での考察は必要である。その意味で後述の二条後の和歌推奨や藤原良房の詠歌は重要な意義がある。

染殿の后のおまへに、花がめにさくらの花をささせ給へるをみてよめる

前太政大臣

52 年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をしみれば物思ひもなし

染殿后は、藤原明子で文徳天皇の后、藤原良房の娘である。この歌には良房の栄華を極めた喜びの気持が詠みこまれている。

文徳天皇の次には清和天皇（在位八五八―八七六）が立たれたのであるが、時に清和天皇が九歳であったので良房が摂政になったのである。臣下として摂政になった最初である。これも清和天皇の母である染殿后明子の力が大きかったのである。そういう点からも良房の歌は意義がある。

一方、惟喬親王は文徳天皇の第一皇子であるが、弟の清和天皇が皇太子になったので、失意の中に風流に一生を過

ごされ、その周囲に在原業平・紀有常などが集まり、和歌が詠まれた。

清和天皇の御代に注目すべきことは二条后の和歌推奨である。二条后高子は、藤原長良の娘であるが、藤原良房の養女となり、清和天皇の后となるのであるが、貞観十年（八六八）貞明親王を生み、翌年親王が東宮になったので「東宮の御息所」と呼ばれた。

二条の後の東宮のみやす所と申しける時に、御屏風に竜田川に紅葉ながれたるかたをかけりけるを題にてよめる

素性

293 もみぢばのながれてとまるみなとには紅深き波や立つらむ

業平朝臣

294 ちはやぶる神代もきかず竜田川唐紅に水くくるとは

屏風歌は、さらに宇多・醍醐天皇の撰者時代になると非常に盛んになり、晴の歌の中心になるのである。その点で業平・素性の歌は注目されよう。

二条後のまだ東宮の御息所と申しける時に、大原野にまうで給ひける日よめる

業平朝臣

871 大原や小塩の山もけふこそは神代のことと思ひいづらめ

二条後の東宮の御息所と聞こえける時、むつき三日お前に召して仰せごとあるあひだに、日は照りながら雪のかしらに降りかかりけるをよませ給ひける

文屋康秀

8 春の日の光にあたるわれなれどかしの雪となるぞわびしき

二条后、東宮の御息所と申しける時に、めどに削り花させりけるをよませ給ひける

文屋康秀

445 花の木にあらざらめども咲きにけりふりにしこのみなる時もがな

以上を見ても二条後の和歌に果たした役割は大きいと考えられる。和歌が宮中で漢詩に肩を並べて行く過程におい

て、後宮の役割は見のがすことができない。寛平時代の「寛平御時后宮歌合」もその点で注目されよう。
さて二条后も歌をよんでいる。

二条后の春のはじめの御歌

4 雪のうちに春はきにけりうぐひすのこはれる涙いまやとくらむ
これについての解釈はいろいろあるが、今は問わない。

貞観の御時、「万葉集はいつばかり作れるぞ」と問はせたまひければ、よみて奉りける 文屋有季

997 神無月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮のふるごとぞこれ

この歌によって分かることは、和歌が多く詠まれるにつれて、「万葉集」に対する関心が出て来たということである。

貞観の御時、綾綺殿のまへに梅の木ありけり。西のかたにさせりける枝のもみちはじめたりけるを、うへにさぶらふをのこどものよみけるついでによめる 藤原勝臣

255 おなじ枝をわきて木の葉のうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ

こうして、宮廷の場で和歌が多く詠まれ、「晴」の歌としての存在を高めつつある。

陽成天皇（在位八七六—八八四）の御代には、「日本紀寛宴和歌」が元慶六年（八八二）に詠まれた。（これについては橋本不美男氏の詳細な研究『王朝和歌史の研究』を参照されたい。）陽成天皇は歌も詠まれる。古今集に、

仁和のみかど、みこにおはしましける時に、人にわかな賜ひける御歌

21 君がため春の野にいでて若菜つむわが衣手に雪はふりつつ

仁和の御時、僧正遍昭に七十の賀たまひける時の御歌

347 かくしつとにもかくにもながらへて君が八千代にあふよしもがな

以上の二首が詠まれている。

仁和の帝みこにおはしましける時に、布留のたき御覧じにおはしまして、帰りたまひけるによめる
兼芸法師

396 あかずして別るる涙たきにそふ水まさとや下はみゆらむ

仁和の帝親王におはしましける時、布留の滝御覧ぜむとおはしましける道に、遍昭が母の家に宿り給へりける時に、庭を秋の野につくりて御物語のついでによりて奉りける
僧正遍昭

248 里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる

仁和のみかどの親王におはしける時に、御をばの八十の賀に銀を杖につくれりけるを見て、かの御をばにかはりてよめる
僧正遍昭

348 ちはやぶる神やきりけむつくからに千年の坂も越えぬべらなり

こうして、陽成帝は、皇太子の時に、自らもかなり歌を詠み、臣下にも詠ませていることが分かる。この陽成天皇の元慶四年（八八〇）五月二十八日に在原業平は没しており（五十六歳）、紀有常も貞観十九年（八七七）正月に没し、六歌仙時代も末期である。このころであろうか、次の歌は家集成立の上で注目される。

惟喬親王の「父の侍りけむ時によりけむ歌ども」とこひければ、書きて送りける奥によりて書けりける
友則

854 ことならば言の葉さへも消えなむ見れば涙のたきまさりけり

このころになると、万葉集に対する関心や家集に対する要求が起こり、こうした事実が重なって、古今集編集に至るのである。

光孝天皇（在位八八四―八八七）はわずかに在位三年であるが、この御代に「民部卿行平歌合」が催されたことは重要

である。菟谷朴氏は仁和元年（八八五）から仁和三年の間に催されたという（『平安朝歌合大成』一）。最初は宮廷周辺の場で催され、それがだんだん宮廷内に浸透して行くのである。そして宇多帝の頃には盛んに行われる。歌合と屏風歌は暗の歌として宇多・醍醐朝に盛んに詠まれ、こうして勅撰集の気運がもり上って行くのである。

三

宇多（在位八八七―八九七）・醍醐（在位八九七―九三〇）天皇の時代を撰者時代という。古今集が延喜五年（九〇五）四月十八日撰進されたので、それまでの約二十年間に和歌は急速に発展し、漢詩に肩を並べるまでに至るのである。宇多帝は有能な菅原道真を抜擢し、新政を推進した。遣唐使を道真の建議によって廃止した。こうして日本在来の変化が一層盛んになる。絵画も大和絵が多く書かれ、屏風歌と結びつくようになる。

寛平の御時、歌奉りけるついでに奉りける

大江千里

998 あしたづの一人おくれて鳴く声は雲の上まできこえつがなむ

藤原勝臣

999 人しれず思ふ心は春がすみたちいでて君が目にも見えなむ

寛平の御時、「古き歌奉れ」とおほせられければ、「竜田川もみぢ葉ながる」といふ歌を書き

て、そのおなじ心をよめりける

興風

310 み山より落ちくる水の色見てぞ秋は限りと思ひ知りぬる

以上の例をもってしても、宇多天皇は多くの和歌を献上させているのであり、こうしたことが重なると、当然撰集ということが起こってくる。

寛平の御時、なぬかの夜、「上にさぶらふをのこども、歌奉れ」と仰せられける時に人にか

はりてよめる

友 則

177 天の川あさせ白波たどりつつ渡りはてねば明けぞしにける

同じ（寛平）御時のうへの侍ひにて、男どもに大御酒賜ひて、大御遊びありけるついでにつ

かうまつれる

敏行朝臣

903 老いぬとてなどかわが身をせめきけむ老いずは今日にあはましものか
このように宇多帝は和歌を推奨し、専門歌人が続出する。

一方、歌合が盛んに行われるようになる。「中将御息所歌合（仁和三年以前）」「内裏菊合（仁和四年―寛平三年秋）」「是貞親王家歌合（寛平五年九月以前）」「皇太夫人班子女王歌合（寛平御時后宮歌合）」「后宮胤子歌合（寛平八年六月以前）」「東宮御息所温子小箱合（寛平九年春）」「亭子院女郎花合（昌泰元年）」「宇多院女郎花合」「朱雀院女郎花合」などが行われている。

このなかで特に重要なのは、「是貞親王家歌合」と「寛平御時后宮歌合」である。村瀬敏夫氏とともに宇多帝の援助があったという『古今集の基盤と周辺』。この歌合には、藤原敏行をはじめとして「古今集」の四人の撰者以下延喜時代に入って活躍したほとんどの歌人が名をつらねている。

道真は、この「寛平御時后宮歌合」「是貞親王家歌合」の歌を材料として、それに漢詩を添えて「新撰万葉集」を編纂し、寛平五年（八九三）宇多帝に献上した。道真の和歌に尽した力は大きいと言わねばならぬ。自らも宇多帝の宮滝御幸に供奉して歌を詠んでいる。

翌年、大江千里は「句題和歌」を作って献上している。これはおもに白楽天の詩句を題にして約百二十首を詠んだものである。道真・千里ともに漢詩人であるので、漢詩と和歌を並べて撰集したところに、和歌の宮廷における地位のいま一步漢詩に劣る姿が見られるが、それは、また「古今集」という勅撰が近いことを思わせるものである。